

日本財団補助金による 1999年度日中医学協力事業報告書

－日本人研究者派遣－

平成12年3月3日

財団法人 日中医学協会
理事長 中島章殿

1. 訪中者氏名 豊澤英子
所属機関名 大分医科大学 職名 教授
所在地 〒879-5593 大分県大分郡挾間町医大ヶ丘1-1 電話 097-586-5092
受入機関名 河北医科大学
所在地 中華人民共和国河北省石家荘市中山東路361号
受入責任者名・役職 河北医科大学長・温進坤

2. 中国滞在日程（訪問都市・機関名等主な日程）

10月23日	石家荘市	大分より移動（福岡・北京経由）
24日	河北医科大学	学長表敬訪問 副学長・教授陣との意見交換及び学内見学
25日	同大学看護学科	教員との意見交換及び学内見学
26日	同大学第四医院	「日本における老年看護の現状」について講演 院長・看護部長・看護スタッフとの意見交換
27日	同大学第四医院	「日本における看護教育の現状」について講演 医師・看護婦・看護学科教員・学生との意見交換
28日	同大学第四医院 北京	臨床研究方法（老年看護）について意見交換 石家荘より移動
29日	帰国	北京より大分へ（福岡経由）

3. 交流報告

交流テーマ：老年看護学分野における研究枠組及び教授法の開発

訪中研究者氏名 豊澤英子

所属 大分医科大学

地域・老人看護学講座

役職 教授

〔1〕訪中目的

大分医科大学と河北医科大学は、学術協定校として医学分野の教育・研究交流を発展してきた。看護学科が1994年に創設され、修士課程が1998年に開設されたのを機会に、看護分野においても両大学の交流を深めることを目的に、1998年10月より国費留学生として河北医科大学第四医院看護婦1名を老年看護学教室に迎えた。この度、看護教育及び老年看護学研究に関して情報交換を行ない、臨床実践及び学士課程教育の質を高めるための活動を促進するとともに、両大学における共同研究の基礎づくりを行いたいと考えた。

〔2〕河北医科大学および第四医院の状況

河北医科大学（Hebei Medical University）は河北省石家荘市に位置する。1915年に医学校が創設され、1995年には11大学及び看護学校2校から成る現在の組織となった。職員数は7,000人で、その内研究領域の教授は266人、助教授は767人である。教育領域の教授は134人、助教授は253人である。博士課程プログラムは3コース、修士課程プログラムは30コースで、学生数はフルタイム8,000人、社会人学生2,000人、日本や韓国からの留学生100人である。河北省の人口は6,000万人であり、多くの医師が必要とされているために学生数が多いとのことであった。基礎医学の研究が進んでおり、毎年1,000人の卒業生の内300人が大学院へ進学している。

河北医科大学は6つの付属病院を有しており、教育・研究関連病院は70病院である。今回の主な訪問先である第4医院（Fourth Hospital of Hebei Medical University）は河北省腫瘍医院とも呼ばれ、ベッド数620で40診療科より構成され、1,500人以上の職員が従事している。その内教授は170人、助教授は160人であり、年間の外来患者数は45万人、入院患者は13,000人で、その70%はがん患者である。特に河北省では食道癌の発生率が高く、食道癌の年間手術件数の多いのが特徴といえる。

河北医科大学には第一医院に5年制、第四医院に4年制の2つの看護学士課程が併設されて

いる。訪問した第四医院では、14年前に看護専門学校が開設され、1998年に4年制の学士課程に発展した。2002年の修士課程開設に向けて準備中であり、看護職を研修のために国内外へ派遣している。その内の一人は、大分医科大学看護学科の研究生として勉学に励んでいる。新病院及び看護学院の建設が進められており、2001年には完成予定である。

現在、学士課程の1・2回生は専門学校当時の校舎と宿舎を使用している。教室・実習室の教材等の設備は十分とはいえない状況であったが、新校舎の準備とともに、人的・物的環境を整えていくとの説明があった。看護学科と第4医院看護部との連携は密であり、学校長と看護部長は、看護教育の質の向上のために熱意をもって各々の役割を発揮していた。

〔3〕講演・指導内容と参加者の反応等

第四医院の院長、副院長、看護部長、医師、看護婦、看護学科教員及び学生を対象として、日本における看護教育及び老年看護の現状について講演した。それらの内容と出席者との質疑応答については次の通りであった。

(1) 日本における老年看護の現状について（資料Ⅰ参照）

日本の高齢化は他国に例をみないほどのスピードで進行しており、21世紀における保健・医療・福祉サービスの質を高めるための社会政策は大きく変化している。激動する時代の中で、看護専門職としてどのような役割を発揮していくのか、新しい分野である老年看護の研究をいかに促進するのか等について述べるとともに、日中両国の看護事情の共通点あるいは相違点について討議した。

〈主な講演内容〉

- ① 老年看護学の歴史
- ② 日本における高齢者の実態
 - ・急速な高齢化
 - ・寝たきり老人と痴呆性老人の将来推計
 - ・1997年衛生の主要指標
 - ・全国の新聞記事にみる高齢者問題
 - ・21世紀の福祉に関する展望
 - ・介護保険
 - ・在宅医療の状況
 - ・寝たきりゼロへの十ヶ条
- ③ 看護職の役割と求められる能力

④ 老年看護学研究の課題

中国の60歳以上の人口は世界でもっとも多く、1、2億人といわれる。しかも、その増加率は毎年上昇しており、急速な高齢化は深刻な問題となりつつある。従って、日本における高齢化社会の問題と社会政策に対する参加者の関心は高く、高齢者の主な疾患と治療、生活の場と家族関係、介護保険の目的と内容、生活保障、将来の人口構造などについて幅広く質問が提出された。

(2) 日本における看護教育の現状について（資料Ⅱ参照）

日本の看護教育は約115年の歴史を有する。当初より現在に至る迄病院附属の形態を中心として看護婦養成が行われてきたが、1990年代になり急速に大学における看護教育が促進されるようになった。1999年4月において学士課程は76校、修士課程は30校、博士課程は9校となった。看護の大学教育に対する社会の期待は大きいと考えられるので、看護カリキュラムをいかに開発するのか、社会のニーズに応えられるサービスを提供するための研究をいかに発展させるかといった課題についてを述べた。

〈主な講演内容〉

- ① 日本の看護教育制度
- ② 大分医科大学医学部看護学科の概要
 - ・教育方針
 - ・教育目標
 - ・教育内容
 - ・カリキュラムの構造
 - ・年次開講科目
- ③ 看護教育方法
- ④ 21世紀における看護の方向性

河北省において看護の学士課程は2大学3コースのみであり、中国全体でもまだ少ない。中国では保健婦（士）のコースはないため、「地域看護学では何を学ぶのか、保健婦（士）はどこで働くのか。」について関心が寄せられた。また、日本の大学病院ICUで研修した医師より「日本の看護婦はほとんど介護業務が中心。中国の看護婦は輸液療法等積極的に行っている。看護の仕事についてどのように考えるか。」について質問があり、看護介入（nursing

intervention) と責務 (responsibility & accountability) について、種々の視点から意見交換を行った。「看護婦と准看護婦はどのように異なるのか」に関しては、教育制度とカリキュラム、資格試験、看護業務等の違いについて説明を加えた。

看護学生からは、開講している科目の内容と実習施設・期間等についての質問があり、学習への積極的な姿勢と熱意が感じられた。

〔4〕臨床と教育現場における課題

中国では医師・看護婦の国家試験はない。各々の病院にて継続教育（院内・院外研修）を行いながら、専門的スキルと管理能力を育成している。第四病院では数年毎に上級看護婦になるための試験を実施している。学士課程の卒業生には、臨床における実践能力を養いながら、上級コースへとキャリア開発していくことが期待されていた。学士課程の目標と継続教育システムが十分に連動していけば、看護の専門性は大いに発展していくものと考えられた。教育現場の課題としては、看護教員の教授能力の開発と人材確保があげられよう。修士・博士号をもつ教員養成の準備は徐々に進められているが、今しばらく時間を要するものと考えられた。

臨床現場の課題としては、病院の特性を活かした看護の専門性の確立と高齢者の継続看護におけるシステム作りといえる。また、学士課程の卒業生の能力をさらに開発するための研修計画や組織作りを促進する必要がある。

21 世紀の高齢化社会において、病院から地域（在宅）へとケアを継続する上で中心的存在である看護婦には、益々リーダー的役割が求められよう。これ迄の臨床中心（病院内看護）の認識から脱し、地域（在宅）ケアまで展望できるように、看護学生・看護職員への意識改革と教育を推進していくことが課題である。

〔おわりに〕

河北医科大学で出会った教職員、事務系職員、看護学生の皆様が笑顔で迎えて下さり、数々の心遣いと温かな接待をいただいたことに深く感謝しています。また、訪中の機会を与えて下さった日中医学協会の皆様に心よりお礼を申し上げます。